

謡曲は「能」の謡い、もしくは「能」の演目のことである。「能」は南北朝期、室町時代に作られた劇の名で、本来は歌舞劇一般を指し、田楽、猿楽などのおおのの「能」があったのですが、現在まで伝わる「能」は猿楽の「能」が起源です。これら芸能の由来はさまざまですが、元来、おおむね社寺の祭礼などの際に奉納されたもので、それが発達変容して今の形に至ります。

近江は今も昔も交通の要衝であり、かつての都に近接し古くから歴史の現場となってきたことから、しばしば謡曲の舞台となっています。「竹生島」「三井寺」「兼平」など、近江が舞台となるものは40曲以上あるといわれます。中でも、とりわけ琵琶湖に深くかかわる曲が『白髭』です。

『謡曲 白髭』のあらすじのどかな春のある日、天皇の勅使が白髭明神へ参詣しました。白髭の宮に着くと、湖岸で釣りをしている翁と若者に出合います。翁は勅使に白髭明神の縁起を語り始めます。

お釈迦様は都率天におられ

たころ（この世に生まれる前）、仏法流布にふさわしい土地を探していて、波の音が一葉の蘆に凝り固まって一つの島となった所に注目していました。この島が今の大宮権現（日吉大社）の橋殿（宮の前の板橋）です。入滅後、その島に目を向けたところ、比叡山の麓、志賀の浦あたりで釣りをしている翁がいました。お釈迦様は「翁よ、この地の主ならばこの山を譲ってくれ、仏法の地としたいから」と言いました。翁は「自分は6千年もこの山の主で、この湖が7度まで蘆原になったのを見た老人なのだ。それなのにここを仏法結界の清浄地とするなら釣りをするところがなくなるので困る」と非常に惜しんだので、お釈迦様もせひなく帰ろうとしました。そのとき、東方から薬師如来が忽然と現れ、「釈迦よ、この地に仏法を弘めようとは実によいことです。自分は2万年の昔からこの所の主ですが、この翁はまだ私を知らないのです。決してこの山を惜しみはしません。私もこの山の主となり共に仏法を守護しましょう」と固く約束して、お釈迦様と薬師如来は西

## 白髭神社

と東に別れて去っていきました。そのときの翁が白髭明神だということですが。

勅使は話の詳しさに驚き、翁に名を尋ねたところ、翁は自分がその明神であることを明かし、勅使を慰めに来たと言いました。そして、もうすぐ天女と龍神が来るころだからしばらく待つように、と言って社壇の中に入りました。夜も更けたころ、社壇の中から白髭明神が現れ、勅使のために舞楽を奏し始めました。そのうち、空からは天女が天燈を、湖水からは龍神が龍燈をささげて現れ、夜明けとともに帰っていきました。

この逸話は白髭神社の由来であるとともに比叡山開闢の話でもあり、琵琶湖のもつ神性とその湖を統べる拠点としての聖なる山・比叡山という心象が根本にあって初めて成り立つ話です。

日吉大社は比叡山、とりわけその東の尾根の一つ八王子山を神体山とし、古い信仰形態の流れをくむ神社です。この古くからの在地の神、大山咋神を東本宮に、後に大和の三輪山より迎えた大己貴神を西本宮に祀り、その本地仏（神の本来の姿）はおの、薬師如来と釈迦如来とされ、『白髭』における2仏の

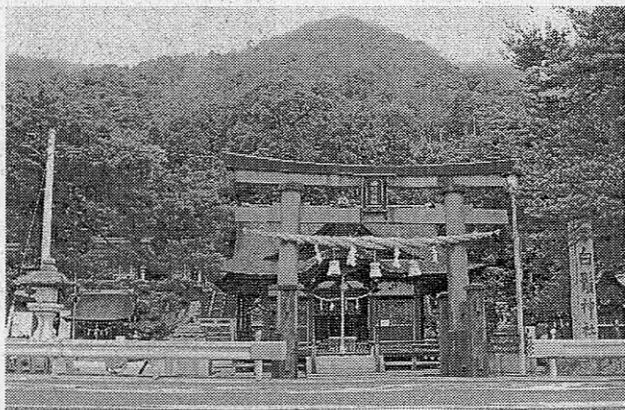
関係を彷彿とさせます。また、この2社を核に、水源を祀る社をはじめ多くの社から成り、その境内を比叡山中や境内に源を発する水がくまなくめぐる、水とのかかわりが深い神社でもあります。

白髭の翁はこの比叡山・比叡山系の地主神であり、薬師如来は水世界の象徴・琵琶湖を統べる神であり、山の守り神です。

山と湖、謡曲『白髭』はまさに、近江の成り立ちを説く物語といえるのではないでしょう。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 小竹志織）

湖側からみた白髭神社の社殿



湖に立つ鳥居

山と湖にはぐくまれた社